慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	資本主義の社会史的研究
Sub Title	
Author	阿部, 秀助
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1914
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.8, No.6 (1914. 7) ,p.729(103)- 738(112)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19140701-0103

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

懺悔派中にては舊敎的組合の數及其組合員の數增加せり。されども舊敎的組合も最近十年間に驚くべき進歩を爲したる「社會民主的勞働組合聯合團」には一歩を讓らざるを得ず。各組合に屬する組合員の平均數は一九〇六年――一九〇八年迄は組合數の減少によりて二一〇二より二八〇〇なるも一九〇八年より一九一三年に至る迄は六四、四三より六七、五一と成れり。亦組合數は漸次多少の增加を見たり。舊敎的組合の組合員は偶然にも前年と同一數を保てり。

勞働運動に關して重要なる地歩を占むるものは「アムステルダム」也。此地には全國の二割五分に當るべき四七、六二七人の勞働者は集中し、尙ほ此地に於ける組合につき總平均數は六四、四三なるに二四三、〇五の組合員を有せり。又同地には勞働運動の全部に大影響を及ぼすかの「勞働組合聯合團」の中心地也。故に亦同盟罷工の中心也。

同盟罷工の平均數

	一九〇一―〇五	一九〇六	一九〇七	一九〇八	一九〇九	一九一〇
アムステルダム大都市	三四、六	三七	三九	四一	四六	四三
全國	一三〇、六	一四四	一三九	一〇八	一四三	一三〇

「アムステルダム」に於ける同盟罷工の平均數は一九〇六年――一九一〇年に至りて、毎年三七、六を算するに「ノートルダム」に於いては其數下りて一三、六にして更に其他の都市について見んか、同盟罷工數は一年平均一回なりと云ふ。

『英國に於いては勞働者に多大の利益を齎すなり。而かも是れを爲す爲めに何等の暴力に訴ふる事なく、或又生産及國民經濟に何等の損害を釀す事なく、或又英國の企業に大打擊を與ふることなし。然れども兩方に於ける長日月の團體運動の結果、及或利益は兩者の爭鬪を馳つて劇烈ならしめそれを調停、和解の運びに至るは頗る困難なることあり』と。「チンメルマン」に依りて指示せられたる英國の如き發達は和蘭勞働組合に於いては到底見るを得ざる所のものなり。其原因如何と云ふに企業家と勞働者間に激しき紛爭なきが故なり。加ふるに敎育、和解の手段は尙初期にあり、而して組合の理想は地を拂つてなし。劇烈なる爭鬪は組合の內部に起りて一組合より他組合に轉々として變ずるものあり。これを防止せんとする事は組合にとりては難問題と云ふべきものなり。其組合を愛する精神もあらずして又此精神を肝養せんと計るも亦難事と云はざるべからず。事態の斯なればこれを救濟せん爲めには計畫的なる方法とも云ふべき規則正しき分配法を定めて、同盟罷工より生ずる大なる損害及不幸を補ふ事肝要なり。縱令永久の困難あるとせるも組合はそれの如何に關せず、勞銀の引上を計り、依是勞働者階級の一般的の經濟上及文明上の向上を計らざるべからず(未完)

資本主義の社會史的研究

阿部秀助

譯者は曩きに「近世資本主義と地代說」(本誌第七卷第三號)なる論文に於て、「ゾムバルト」敎授の近世資本主義起源說に對する反證を提供せしが、今や、此方面の研究に對して、有名なる白耳義の史家「アンリー・ピレン」の論文を得たるは、譯者の衷心、悅に堪へざる處なり、本論文は本年四月、倫敦に開催されし萬國史學大會の講次として最も好評を博せしも、今、最近の The American Hitoncal Revoiew vol. XIX p. 494-515 によりて、其槪槪を敍述すること左の如し。

吾人の目的とする處は、經濟史上の各時期に於て資本の所有者たる資本家の特性を明かにすると共に、併せて之れが起源を攻究するにあり、而して、吾人の信ずる處によれば、中世の初期より現時に至る迄、經濟史の區分せらるゝ各時期に於ける資本家は相互に相異なる階級より輩生せり、換言すれば、或時代の資本家階級は必

ずしも其前時代の資本家階級より輩出せしものにあらず、卽ち或時代に活動せし資本家にして自己が新境遇に適合すること能はざるを見出せし場合には、彼等は經濟上の活動より遠ざかりて一種の土豪となり、之れに代りて、勇氣あり且つ企業的精神に富む新人物の出現せしものなりとす、吾人は之れが發展を述ぶるに先ちて、少しく此方面に對する獨逸經濟學者の研究上に於ける弱點を指摘せんと欲す。

中世の企業者を以て日常生活の材料を求むる以外に、何等の餘裕なかりしとなす、「ピュヒヤー」派の學說の缺點は、彼等が中世の都市經濟を研究するに、主として、獨逸の都市殊に十四、十五、兩世紀に於ける同國の都市を以てせる點にあり、然かも同時代に於ける獨逸都市の大多數を以て、北部伊太利方面の都市に比較する時は、其間、發展の狀態に於て著しく相異なるを發見す可し、卽ち獨逸方面の都市の代りに「フロレンス」「ゼノア」、「ベニス」、「ゲント」、「ブリユージ」、「イープル」等を研究せんか、我等は「ピュヒヤー」の徒と甚しく異なりたる見解に到達するに至る可し

吾人は資本主義の發生を以て、世人が普通、信ずるよりも、更に古き時代に存することを認むるものなり、勿論、現時に於ける之れが活動が中世の、それに比して甚しく大規模なるは明かなるも、しかも斯くの如きは、只だ單に數量的相違にして、質的相違にあらず、蓋、西曆十一世紀の中頃以前卽ち歐洲諸國に於て都市なるものゝ多く出現せざりし時代の狀態を見るに、先づ西曆八世紀の初期に於て、伊太利及「ゴール」地方に於ける羅馬の經濟組織破壞せらるゝや、當時の社會は純然たる農業組織の上に築かれ、只だ時に農產物過剩の地方より之れが缺乏を感ぜし地方に輸送せられしことあるも、多く、收穫物は廣大なる地面を有する豪族の手にありて未だ商賣用に使用せられず、次ぎに葡萄酒と食鹽とは商品として賣買せられしも、然かも之れが轉賣に從事せし徒は、所謂一時的商業を營むものにあらずんば、多く半ば商人たり半ば掠奪を事とする徒たりしこと、尙ほ今日、亞弗利加大陸の黑奴間に見る亞剌比亞商人に類似せしものなりとす、例者、八世紀の初期「エルベ」方面に於ける冒險的商人の頭首たる「サモ」の如き、之れが典型なり、然かも斯くの如き徒輩を以て誰人も將來に於ける資本家の祖先と見做す人はあらざる可し、而して、此の如き人物を刺激せし精神が、多少、他方面に刺激を與へしことあるも、亦た、僧俗の如何を不問、大地主たるものが其附近の市場に於て自己に必要なる商品を求め、且つ自己が需要以上に超過せる穀物、葡萄酒を賣出せしことあるも、此場合に於ては、未だ資本主義の痕跡を見出すこと能はざるなり又、地理上の好地位より發達せし商業地、例者、海岸地方にありては「マルセイユ」「ルアン」「クアントビク」の如き、河流地方殊に羅馬の國道が水流と相交る地、卽ち「メウセ」河畔の「マーストリヒト」、「シエルト」河畔の「ヴアレンシエンヌ」の如き、多く貨物の陸揚場、船乘の冬營地にして、之れを以後の都市に比する時は著しく相異なりて、何等、市自身を圍む城壁なく、建物は多く木造、住民は常に不定にして、彼等は何等の特權を有せざる點に於て、後ちの町人と異なれり、但、此間、周圍の事情に刺激せられて、規律ある生活方法を採るものゝ稍々生ずるに至りしことは疑ふ可からざる事實にして、現に九世紀には商業を以て職業とする徒發生せしも、此方面に關しては精細なる證左を缺げり、次ぎに信用制度に就きては「カロリンガ」朝時代に公債なるもの、存せしこと明かなるも、斯くの如きは、火災、戰爭、凶年の用意に供せらるる一時的不生產的公債なりしを以て、之れを以

て資本主義的運動の存せしものとは見做ずを得ず、要するに、中世の初期は全く資本の勢力を無視せし時代にして、彼の富有なる地主と修道院とに集積せられし財産は全く怠惰化せられしものにして、殊に大地主の徒は部下の小作人より集めし收入を以て記念碑の建立、美術品其他貴重品の買入に消費せり、斯くの如きは社會的見地より觀察して或は必要なる事項ならんも、之れを經濟上より觀察する時は、全く無意義のものなりとす、何んとなれば、彼等の財産は何等商人の手に渡ることなく、從つて商業上の活動を覺醒する要素として少しも貢獻することなかりしを以てなり。

次ぎに、十世紀の終末より十一世紀の初期にかけて、商業的活動は伊太利と「ネーデルラント」方面に發生するに至れり、即ち前者によりて活動の中心となりしものは「ベニス」「ピサ」「ゼノア」等にして、是等の都市は專ら希臘帝國及回教國を相手として沿岸貿易に從事し、其取引狀態は絶えず增加せり、後者は「ブリュージ」對、英國、北部獨逸地方、及「スカンヂナヴィヤ」地方にして、之れが經濟生活も亦た其の初期にありては、希臘の初期に見るが如く沿岸に限られしが、然かも兩者の商業は漸次內地方面に擴がり、遂に十二世紀の初期に於て南北歐洲の聯絡を見るに至れり。例者、千百二十七年「ロンバルト」地方の商人は「アルプス」を越えて「シャンパーニュ」及「ネーデルラント」方面に現はれしが如きあり、又た一方に於て、商業の進歩發達は地方の農民をして絶えず都市に流入せしめ、斯くて、交通の衝路に當れる新舊都市に於ける人口の增加となり、市に接近せる地方の市有化となり、新市場の增設となり、都市其者の原形體は四面、移住者によりて圍繞せらるゝに至れり、而して歐洲諸國の都市に於ける當時の町人は此移住者の階級より生ぜしものにして、彼等の中より當時に於ける商業界の水先案內者たる力量あり、鞏固なる意思を有する徒の輩出せしものなりとす、即ち「ブヰンチェル」の「ゴドリック」は之れが例證たる人物にして、彼れや「リンカルンシャイヤー」の憐む可き一農民に過ぎず、しかも、一度、商業を以て自己の渡世の業務となすや、專ら英國、蘇格蘭、丁抹、「フランダー」方面の沿岸貿易に從事して巨額の富を集積するに至れり、其他、十一、十二兩世紀に於ける商人組合は何等地方的割據的にあらずして、各都市の町人は相互に取引上の自由を有し、其間、何等官權の干涉なく、各組合が極めて激烈に、極めて自由に競爭せし狀態は、吾人をして、漫ろに十六、十七兩世紀、新大陸に於ける和蘭、英國、佛國、西班牙等の競爭を偲ばしむるものあり、之れを要するに、十二世紀の末期迄の歐洲都市の人口は比較的少く、只だ地の利を占むる處のみ、多く商人を吸收し、而して彼等は多く主なる都市の組合に加入せしものなりとす、又た當時に於ける都市は、工業よりも力を商業に注ぎしものにして、市內に手工業者を集中せしむることは、當時、尙ほ不完全にして、商人が葡萄酒、穀物と共に輸出する工業品、例者、衣料の如きものは多く都市其者の生産にあらずして、地方の産物なりとす、然かも吾人は一般の所說に反對して、既に十三世紀以前に自由なる資本主義的發達の一時期あるを承認するものなり、勿論、當時に於ける資本主義は集合的資本主義なるを以て、之れを活動せしむる能力を缺ぐ場合は、其事業をして沈滯せしむるに至る、實に理智は資本主義の基礎をなせるものなり。

十一、十二兩世紀に於ける巡回的商業によりて集積せられし財産は其後速かに土地經營に放下せられ、十三世紀には地主的豪族（Veriheditarü, dusles, mazores）の階級を見るに至れり、而

して市内に於ける人々の增加は地代の騰貴となり彼等をして益々富ましむるに至りしせば、其祖先は商業を營みしに不拘、彼等は商業其者より遠ざかりて、專ら土地收入によりて裕富なる生活をなし、彼等の或者は王侯の城廓に類似する宏莊なる石造の建物に住し、或者は市政の樞機を握り、又た或者は貴族と婚を通じて、武士化せしものあり、斯くて資本主義の第一時期に於ける資本家階級の多くは、商業界より退きて、玆に經濟組織上必要なる變化を來たすに至れり。

十三世紀は西部歐洲にありて大小都市の發達せし時代にして、市内に於ける富の增加と共に都市其者は漸次工業化するに至り、加ふるに田園の荒廢は地方に住する手工業者をして市内に入らしめ、彼等の多くは、其附近地方に於ける豐富なる原料品に加工して特殊的工業の發達を見るに至りしこと、當時に於ける織物業及金屬業に見るが如し、想ふに、此時代の都市には自

から二個の典型あり、卽ち大都市と地方的都市とにして、前者にありては輸出向工業の發達せるもの、例者、「フランダー」及伊太利地方に於ける織物業の如く、彼等は單に其地方的市場を目的とせるものならずして、寧ろ歐洲其者の市場を目的とせしものなりとす、他は伊太利、英國、佛國、殊に北部獨逸の都市に見るが如く、海に近き結果、專ら力を海運業に注ぎし都市なりとす、第二、地方的都市は地方的交通を以て滿足せしものにして、彼等の生產物は多く市内及其附近地方へ仕向けらるゝと共に、一方には其附近地方より食料品の供給を受けしものにして、斯くの如き都市の特徵としては、生產者と消費者との直接的交換、其地方的市場に外國人の入るを好まざること、商工業上に幾多制限的規定の存すること、資本主義に反對する傾向、換言すれば何等大なる事業、大なる商人の存せざりしことなりとす、尙ほ前者の場合にありては、

信用制度の發達(「シャンパーニュ」の如き)交通機關の改善(羅馬時代の橋梁の改築、運河の開通、堤防の造築等)奢侈の增加(「イープル」市の狀態)等著しく、殊に海外企業卽ち羊毛、織物、葡萄酒等に關する取引の盛大なりしことは千二百七十三年に於ける「ピアチェンツァ」の「スコッチ」が英國より輸出せし羊毛の額が二萬一千四百磅に達せしが如き之れが好個の例證たり、其他、千二百五十四年、「アルラム」の町が「グイゼ」侯に二萬「リーブル」を貸與せしが如き、同じく千三百三十九年に「メシラン」の商人が英王「エドワード」三世に五萬四千「フロリン」を貸與せしが、其例擧げて數ふ可からず、之れを要するに、十三世紀初期以後の資本的企業は其以前の時代の如く、之れが活動に於て自由なるものにあらず、卽ち市制と保護主義とは、苟くも市内に於て生產せらるゝ工業品に對して競爭の地位にあるものを齎らすを禁じ、又た市の制度は只だ單に勞働者の勞銀と、勞働の條件とを規定せしのみならず、併せて、純全たる商業上の事件に關しても商人の獨立的活動を制限せり、例者、織物業者にして羊毛販賣者を兼ぬるを禁じたるが如き卽ちこれなり、蓋、經濟的進化の經路は各次の能力に於て最も適したる商工業者の團體に其種の工業を特種化し、或は商業上、或種のものを制限せしことあり、例者、十三世紀にありて精巧なる織物の取引が「フランダー」地方の獨占たりしが如き、又、銀行業が專ら「ロンバルヂー」、「プロヴァンス」、「トスカナ」地方の商人によりて獨占せられしが如きあり、而して斯くの如き狀態の下に、彼等の或者は仲買業によりて、奇利を博し、或者は工業市にありて、出來る丈け、手工業者を虐待して自己の囊中をあたため、(例者「ドネー」の「ボアネブローク」の如きは多數の勞働者(大多數は婦人勞働者)を奴隸の如く使役し、又、或者は當時の王侯を顧客とし

て、其間大なる利益を占めしことあり、例者、百年戰爭に於ける「ロンバルド」對「エドワード」三世の如く、「カホール」の「セルヴー」が數年間に非常なる富を集積して、其一部を諸威王に貸與せしが如き、其他「トーマス、ファン」、「ベルニエロー」、「トート、グィス」、「ヴン、グィス」の如きあり)。然るに、海運業の發達、西班牙及葡萄牙兩國によりての新大陸の發見、大帝國の出現等は從來の經濟的狀態を破壞し、商業上の潮流は茲に變化するに至り、北部歐洲にては英國と和蘭とは「ハンザ」の勢力を奪ひ、地中海に濱する「ベエニス」と「ゼノア」とは共に東西貨物の集散地たる資格を失ひ、これに代りて、大西洋方面にては、「リスボン」市香料に關する大市場となり、「アントワープ」は「ブリュージ」を凌駕して歐洲商業の中心となるに至れり、斯くの如きは道德上、政治上、經濟上の諸原因によるものにして、卽ち文藝復興期に於ける人智の進步

個人主義の發達、投機的精神を刺激せし大戰爭金融狀態の混亂、新大陸に於ける貴金屬の發掘等なりとず、而して中世の學問すたれ、人道派「スコラスチック」派に代りしが如く、新經濟は當時の都市經濟の地位を占め、國家は都市を自己の下に隸屬せしむと共に、其獨立權を奪ひ、其結果、町人の保護主義及排外主義は其終りを告げ、所謂、手工業者組合は存するも、彼等は勞働者團體を支配する能力なく、新工業は都市其者の支配を離れて發達し、昔時の特權なる都市と相併んで工業上の新中心勃興せり、(例者、英國にては「シェフイールド」「バーミングハム」及「ブランダー」地方にては「ホンショート」「アルメンチェル」)而して、當時の企業界に現はれし精神は、尙は當時の學問界に於ける自由討究の精神と同じく、總ての傳說を排し、加ふるに投機的精神は無限に活動し、斯くて數年にして巨萬の富を積みしものあれば、又た一方には自己

の財產を悉く蕩盡せしものあり、彼の「アントワープ」の取引所の如きは此間の消息を最も明かに示せしものにして、以上、經濟界の大混亂は中世の末期に於ける資本家によりて、營まれし活動を更に新人物の階級に移すに至れり、何んとなれば十五、十六兩世紀に於ける企業家には十四世紀に於ける企業家の子孫少きを以て知るを得可し、而して新時代に於ける新人物は何れも當時の成金黨にして、其著しきものには、商業上佛蘭西の「ジャック、クール」、獨逸の「フッガー」及其他の資本家「フロレンス」の「フレスコバルヂ」及「グアルテロッチ」「ピストア」の「ガスパー、デュク」和蘭の「ウヰルレム、ウセリンクス」「バルザツアル、ド、モウセロン」「イサーク、レメール」等あり、又、工業の方面にては、有名なる印刷業者たりし「クリストフ、プランタン」の如きは「ツーレン」の一農家に生れしものあり、而して此の如き資本主義的運動は十六世紀の後半期に於て其項點に達せしが、更に十六、十七兩世紀に於ける重商主義の運動の爲めに商工業上に於て、之れが運動は阻害せらるゝに至れり、勿論「自由は商業の生命なり」との思想は未だ全く地を拂つて去らざりしも、然かも一般公衆の利益を擁護する爲、或程度迄個人の企業的自由を制限することゝなり、或は監督官領事の任命、商業會議所の設置等ありて茲に國民經濟の時期に入るに至れり、然るに、十八世紀末より十九世紀の初期に於て英國其他の諸國に發生せし器械の發明、及蒸氣力の製造工業に應用せらるゝに至りしことは經濟的活動の狀態を一變し、彼の十六世紀に見たるが如き經濟的現象は更に十數倍餘の力を以て出現せし結果として、從來企業界に活動せし人物は、自から企業界を遠ざかりて一種の土豪と化するに至れり、而して彼等に代つて現れしものは企業的精神に於て、鞏固なる性格に於て共に出色の新

人物にして、彼の自耳義に於ける大工業の創叛者たる「ジョン、コックリル」の如き元來、一職工に過ぎざりしものなりとす、而して此企業的傾向の極端に馳せしものは、一方には社會主義あり、一方には企業上の合同又は聯合と化するに至れり。

之れを要するに、資本主義なるものは決して直線的の發達をなせしものにあらず、其間、幾多の恐慌によりて幾多異なりたる刺激によりて切斷せられたるものなりとす、卽ち巡回的商業の自由なる發展は都市經濟によりて其終りを告ぐると共に、文藝復興期の個人的活動は一變して重商主義の時代となり、最後に自由主義の時代を繼續せしものは社會政策の時代たる現時の狀態となす。（完）

謹告

本誌八月號は都合に依り休刊仕候　追而九月號は例月の通り發行致し十月號は特に紙數を增加致す豫定に有之候

批評と紹介

比公の社會政策

(Annie Ashley, The social policy of Bismarck)

比公は世界史を飾れる人傑なるを以て、其生涯を記述し、評論せるもの少からず、就中、「レンツ」の如き「マークス」の如き、最近にては「ホフマーン」の如きあり、遮莫、此偉人の社會政策方面に關す消息を傳ふるものに至つては、吾人の不肖のなる「ブロトニッツ」(G. Brodnitz, Bismarcks nationalökonomische Anschanungen) 及最近「シュナイダー」(O. Schneider, Bismarcks Finanz u. Wirtschaftspolitik) 以外、多く見る處あらず、今、本書を得たるは一般の讀書界殊に英國の讀書界にとりて悅ばるゝ處なる可し、而して本書の價値に至りては、其卷頭を飾れる「シュモラー」の言に、「余が學友「アシレー」教授は余に求むるに其令孃の著たる「比公の社會政策」の緒言を認む可きを以てせり、余は悅んで其需に應ずると共に、非常なる滿足を以て此書を讀了せり、余は衷心、英國の讀者が此著によりて比公の性格及獨逸保險法案の起源及本質に就きて明白なる理解を得るを信ずるものなり、勿論、鐵血宰相及彼が政策に關する批判と英、獨兩國に於ける保險法案の比較に就きて多少著者自からの主觀的色彩を混ずることは、勢、止むを得ざる處なるも、然かも余は是等の所論に就きては非常なる興味を以て讀下せり、蓋、余の見る處の全く、著者と相同じからざるは、兩者の見地の相異なるによるのみ」と、而して、著者が比公の社會政策に下したる結論としては、保險法案によりて、當時獨逸の人心に蟠りし不滿不平の聲を靜めんとする比公の希望は充分達せられざりしと雖、然かも他の一面に於て國民生活